

令和七年度卒業証書授与式式辞

木々の芽吹きが始まり、春の息吹を感じる今日の佳き日、ご来賓、保護者の皆様及び、ご家族の皆様の御臨席を賜り、愛知県立小牧南高等学校第四十四回卒業証書授与式を挙げていきますことは、卒業生はもとより、在校生、教職員にとりましても、大きな慶びでございます。高い席からではございますが、教職員を代表して、心より厚く御礼申しあげます。

保護者の皆様並びにご家族の皆様におかれましては、幼い頃より、日々愛情を注ぎ、大切に育ててこられたお子様が、本校へ入学してからの三年間で心も体もたくましく成長し、本日ここに、晴れの卒業の日を迎えられたことに、感慨もひとしおと、心よりお祝い申し上げます。また、今日まで本校の教育活動に深い御理解と温かい御支援をお寄せいただきましたことに、重ねて感謝申し上げます。

さて、ただ今、卒業証書を授与した二百二十名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうでございます。小牧南高校の教育課程を修め、めでたく本日を迎えることができたのは、皆さん一人一人が「知行恕」の校訓の下、努力を積み重ねてきた成果です。心から敬意を表します。

校舎の廊下の窓から北の空を望むと、正面に小牧山、そのはるか先には御岳が空を割るようにそびえています。古より、雪解けの水は岩を削り、運ばれた土砂が堆積して、いつしかこの尾張野を作りました。やがて、この小牧の地にも人々が住まい、村、町が栄え、ついには校歌に唄われる「近代の鼓動」がこだまするまでになりました。この鼓動は交通の要所として発展してきたこの町の活気であり、また皆さんの中に満ちている力の源でもあります。こうした悠久の時の流れの中に、本校で過ごした三年間を重ねて俯瞰すると、それは刹那、瞬きをするほどの短さです。あなた方の実感はどうでしょう。三年間は短かったか、それとも長く感じたか。

時間というのは不思議なもので、最先端の物理学をしてもまだ解明できていませんが、古代のギリシャ人は時間には二つの側面があると考えました。一つは、カレンダーや時計などで計測することができる流れる時間、二つめは時間の流れの中に刻むことのできる一つの瞬間です。流れる時間は誰にとっても同じ長さ、また、止めることも戻すこともできません。一方で、流れる時間の中にどのような瞬間を刻むのか、またそれにどのような意味をもたせるのかは、私たち個人次第です。古代ギリシャ人はこの瞬間を司る神をカイロスと名付け、「チャンスの神」として崇めてきました。牧南生として過ごした三年間は、誰にとっても同じように流れた三年という月日です。しかし、刻まれた一瞬を切り取ってみれば、ある人にとっては意味があった時間でも隣の人にとってはみればそれほどでもなかったということがあり得ます。もし、皆さんがこれまでの三年間を振り返ったときに、あの時は意味があったと懐かしく思い出せる瞬間を数多く刻んでいたとすれば、我々教職員としても嬉しい限りです。努力が成功につながった瞬間、無我夢中で取り組み感動を味わった時、悔しさから立ち上がった、苦しみを乗り越えた、とにかく嬉しかった、楽しかった、安心できた。皆さんがこの先の人生においても、等しく流れる時間の中で自分にとって固有の大切な一瞬を刻み、チャンスをつかみとれるよう願ってやみません。

時間と同じように不思議なのは自分という存在です。自分らしさとは何でしょう。どうすれば理想の自分に近づけるのか。我々の体の中では、何十兆もの細胞が常にダイナミックに入れ替わりながら互いに関係性を保ち、体全体のバランス、平衡状態を保っています。分子生物学者の福岡伸一さんは、これを「動的平衡」と呼び、独自の生命観を唱えて有名になりました。体の部位によっては一週間もあれば全ての細胞が新しくなり、体のおよそ三分の二を占めると言われる血液の細胞でも数ヶ月程度で新しいものに生まれ変わります。つまり、三年前に入学したばかりの皆さんと、今卒業を迎えた皆さんとでは、細胞レベルで見たときにかなりの部分で入れ替わっている。少々乱暴な言い方をすれば、別人と言ってもよいほど劇的に変化しているのです。諺で「健全な精神は健全な肉体に宿る」と昔から言われるように、体が変われば心の持ちようも変わります。体調によって、頭が妙にすっきりしたり、逆に気分が優れなかったりということは誰でも経験したことがあるでしょう。自分は自分と思っている存在は、実は、どんどん生まれ変わり、新しい自分になっていると言えます。

ところで、世界的な傾向を見ると、西洋と東洋とでは自分というものの捉え方に隔たりがあるようです。西洋では自分らしさを自我、或いはアイデンティティと呼び、他人とは異なる唯一無二の存在と考えます。人々からは自らの生き方を追い求めたいという強い意志が感じられます。一方で、東洋、特に仏教の思想では、自分と他者との間に明確な境界線を引くことはしません。自我の対局にある無我の境地というものを追い求めています。さて、自我と無我、皆さんはどちらに共感するのでしょうか。現代の世の中には唯一絶対と言えることはあまり多くはありません。通常、幾つもの選択肢の中から最適解を選び取ったり、自分にとってのベターな選択をしていけるようになっていきます。実は、先ほど紹介した分子生物学者の福岡伸一さんの主張には、東北大学の河田雅圭教授らが科学的に整合性がないと反論しています。また、当たり前のように感じられる時間の流れについても、最先端の理論物理学は、流れる時間というものは存在しない。流れるように感じるのは人間の錯覚に過ぎないと言っています。世の中は複雑です。科学のフロンティアでなくとも、分からないことは身の回りにたくさんあり、様々な見方や考え方が存在します。一見常識と思われるようなことでも、振り子のように右に振れたり左に戻ったり、常に揺れ動いています。卒業生の皆さん、自我であろうと無我であろうと、大切なのは自分を作り変えていくプロセスです。目の前のやるべき事に真剣に取り組んでください。今を真摯に生きてください。そうすれば結果は後からついてきます。

最後に、今回この式辞を用意するに当たり、私よりも皆さんを近くで見守ってこられた三年生の先生方に、皆さんの様子をうかがいましたので触れておきます。印象的だったのは、教える側でありながら多くの先生が、生徒の皆さんに「勇気づけられた」とか、「皆さんのおかげで一年を乗り切ることができた」と感謝されていたことです。「優しい生徒が大勢いる。」「さりげなく人に手を貸すことができる雰囲気がある。」「一緒に笑ったり、時には涙したり、相手との心のつながりを大切にできる生徒がたくさんいる。」先生方は、「皆さんを誇りに思う」「一緒に過ごしたのはどれも幸せな瞬間だった」「かけがえのない思い出として心

に刻まれている。」などと、これまでの時間を振り返っていました。

卒業生の皆さん、皆さんのこれまでの学校生活は、こんな風に考えていた先生方や、保護者の皆さん、ご家族、同窓生、先輩や後輩、クラスメイトなど、多くの人々の様々な思いや心遣いに支えられていたということをどうか心に留め、これからも、校訓である恕の心を大切に、知のまことを求め、行動して行ってください。

結びに臨み、本日、公私ご多用のところご臨席を賜り、卒業生の門出に花を添えてくださいましたご来賓、保護者の皆様及び、ご家族の皆様方に改めて御礼申し上げますとともに、二百二十名の卒業生の前途に、幸多からんことをご祈念申し上げ、式辞といたします。

令和八年二月二十七日

愛知県立小牧南高等学校長 井上 猛